

わたしの隣人は誰ですか

奨励	渡部 信〔わたべ・まこと〕
奨励者紹介	財団法人日本聖書協会総理事 NCC副議長 青山学院評議員

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに寄せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10章25—37節)

「善いサマリア人」のたとえ

このチャペル・アワーの礼拝で、皆さんと共に聖書の御言葉を分かち合う機会が与えられましたことを感謝いたします。特に春学期はルカによる福音書10章から「隣人を自分のように愛しなさい」をチャペル・アワーのテーマとしている旨を伺いました。本日はそのテーマに沿った形で「わたしの隣人は誰ですか」と題し、一緒に主なる神、イエス・キリストを礼拝したいと思います。

ルカによる福音書10章の25節から始まるイエス・キリストの教えは、しばしば「善いサマリア人」と呼ばれる大変有名な箇所です。アメリカに行きますと、「サマリタン・ホスピタル」という名前の付いた病院を度々目にします。つい最近、私はノースカロライナ州にある「サマリタンズ・パース」というキリスト教の緊急援助支援団体を訪れましたが、このように隣人愛を象徴する言葉として「サマリタン」という言葉はよく使われます。

ある一人のユダヤ人が旅の途中、強盗に遭い、瀕死の重傷を負ったにもかかわらず、同じユダヤ人の祭司も、神殿に仕えるレビ人も、見て見ぬふりをして助けませんでした。隣国の仲の悪いサマリア人だけが、そのユダヤ人をかわいそうに思い、手当をし、ロバに寄せ、宿屋に連れて行き、すべての面倒を見て、さらに金銭的な負担をしてまで、親切の限りを施しました。イエスは、律法学者や宗教的規則を守るファリサイ派の人びとに対し、このたとえ話をもって「隣人を愛する」とはどういうことなのかを教えたのです。

イエスが聖書のなかで語られたたとえ話の内容は、エルサレムからエリコへの道中での出来事という設定ですが、イスラエルに行きますと今もその道は寂しい荒野にあり、いつ強盗に遭ってもおかしくないような所です。当時、実際に起こっていた題材をイエスは扱ったと考えてよろしいでしょう。このたとえ話を聞いている人は、すでに「あなたの隣人を愛しなさい」というイエスの教えを知っており、では「その隣人とは実際に誰のことですか」と問うところから、このイエスのたとえ話は始まっています。

皆さんもご存じの、マタイによる福音書の「山上の垂訓」という箇所で、イエスは、「自分の親しい者を愛したからとて、何の徳があらうか。そんなことは誰でもしている。隣人を愛せよということは、好きな人を愛するだけではなく、愛することのできない人さえも愛することだ。究極的には、私たちの敵をも愛する、右の頬をがたれたら、左の頬を差し出すぐらいのふところの深さ、隣人を愛しなさい」と教えています。だから、誰が隣人で愛するかという問題は、その人が自分から愛していない人にでも進み出て、その困った人のそばに行き隣人になること、その結論にイエスは導かれようとしたのです。

隣り人になる

私が青年時代に通っていた教会の牧師は、いつも教会員のなかで、一番牧師を困らせる人に声をかけ、自分の家に呼び、ご馳走してもてなしました。そうするとその教会員は立派な信徒に成長していくのです。その牧師は、教会員を愛するということはどういうことなのかをよく知っていた方だったと思います。

先ほどご紹介しました「サマリタンズ・パース」という慈善団体は、2年前の3月11日に起こった東日本大震災の際に、わずか1週間足らずで、大きな輸送機に毛布・水・生活用品・食糧などを満載してアメリカから東京の横田基地に舞い降り、そこからトラックで現地入りし、誰よりも早く被災者の救援活動をしました。人びとは驚きました。見ず知らずの人びとからたくさんのお金や物資が日本の政府機関より早く届き、それを手伝った人は皆、奉仕の人で、迅速にその働きがなされました。この援助を行うには難しい手続きも、誰かの許可を受けることもありません。費用もその団体がすべて負担し、一方的に愛の手が差し伸べられたのです。アメリカ人の誰がいくらか献金したのかも分かりません。およそ11億円相当の物質援助でした。隣り人とは、「いつも隣にいる人」を指すのではなく、「遠く離れている人、一度も会ったことのない人、その助けを必要としている人」、の隣り人に自らなる。これがイエスの「隣人を愛せよ」という教えなのです。

愛の働き

私は昨年、韓国の南部に位置する木浦（モッポ）という町から招待され、ある孤児院を訪れました。その孤児院には、高知県出身の田内千鶴子（たうちずこ）さんという一人の日本人女性が深くかわっていました。千鶴子さんは、戦前に韓国の青年と結婚しましたが、夫の死後も日本に帰国せず、太平洋戦争と朝鮮戦争という二つの大戦で孤児になった韓国人の子どもを自分の家に連れて来て、育て、58歳でその生涯を全うするまでに3000人もの孤児の世話をし、社会に送り出した女性です。木浦を訪れたのは「田内千鶴子生誕100周年記念式典」に出席するためでした。太平洋戦争が激化するなか、韓国人と結婚すること自体、そして敗戦後にはかつて占領した日本人として、韓国人の憎まれ口を聞きながら、それにもかかわらず、一人の韓国人孤児を見捨てない、その彼女の愛が、3000人という孤児に生きる力と愛を与え、彼らの人生を救いました。今でも「韓国孤児のオモニ（母）」として慕われ、尊敬の念を受けて止まないこの田内千鶴子さんを共に偲ぶ心温まる式典でした。彼女の功績は、まだ日本のマスコミには多くは知られていません。

昨年は日韓関係が竹島問題で悪化し、私も正直、韓国に出かけることに躊躇し不安を覚えました。木浦の市民と共に田内千鶴子さんの働きに感動し、本当に友好的な交わりのなかで私は帰ってきました。日本でも、孤児院を始められたクリスチャンの方々がありますが、異国の地で韓国人の孤児を育てるということはまさに「善いサマリア人」の愛なしにはできないことでしょう。彼女は臨終の床で、「最後に梅干しを食べたい」とひと言告げたそうです。彼女はやはり日本人だったのです。式典では同時に、「国連世界孤児の日」制定請願決議文を日韓双方で採択しました。

一体、どうしてこのような愛の働きができるのでしょうか。イエスが「あなたの隣人を愛せよ」と教えたからか、それとも「あなたの敵を愛せよ」と教えたからでしょうか。難しく考える必要がないほど、このたとえ話は明確です。人びとは理屈ではなく、その愛の行為に感動したからこそ、イエスが「この強盗に襲われた人の隣人になったのは誰か」と質問した際、「そのサマリア人です」と口をそろえて答えたのです。私たちはとかく、愛とは何か、その人をどこまで愛せるか、と議論します。私たちは「どうしたら人を愛せるか」などと、理屈で人々を愛することはできないのです。

なぜ、「サマリタンズ・パース」のような働きがなされているのか。この団体はピリー・グラハム伝道協会のフランク・リン・グラハムという人が運営しているクリスチャン団体であります。なぜ、田内千鶴子さんのような愛の奉仕ができるのか。彼女の父は日本の外交官で、若い時に彼女はクリスチャンになり、音楽の奉仕のため韓国に渡りそこで一生を終えました。女優の石田えりさん主演で映画化され、1997年、日韓両国で上映されました。「愛の黙示録」は今もDVDで見ることができます。

「善いサマリア人」は誰か

最後に、実は私が今日、この「善いサマリア人」の話を読んだ際に、どうしても避けては通れないメッセージがあります。それはなぜ、その「善いサマリア人」の話に私たちは感動するのか。一体この「善いサマリア人」は誰かということです。実はルカによる福音書自体に答えがあります。「この善いサマリア人」とは、このたとえ話を語られたイエス自身であり、すべての人びとのため、自分に敵対する者を愛し、自ら相手の過ちを身に引き受けて十字架で命を差し出されたことを意味しています。ルカによる福音書だけが記した十字架上の言葉に、「父よ、彼らを赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と自分を憎む者に対し、イエスは神の愛と救いの言葉を述べられ、その罪の赦しを宣告されました。

私たちは見知らぬ人から愛の行為を受けるとき、どうしてこの人たちは私たちのためにこのような親切をしてくれるのだろうか、と考えます。そのときは分かりません。しかし、お金も奉仕もタダでは湧いてきません。誰かが背後で喜んで犠牲を払っている愛の結実が、私たちのところへ届けられる。私はその「サマリタンズ・パース」の本部を訪れ、お金の他にさまざまな品物が寄付された倉庫を見て参りました。また、無料で外国の地で医療活動をする医者たちのボランティア組織も見してきました。もし、このような愛を受けるなら、今度は自分たちが助ける側になって善いサマリア人になることができるでしょう。

田内千鶴子さんが、どうしてお金がないのに3000人もの孤児を育てることができたのか。その施設は現在でも、決して立派で大きなものではありません。実は運営のお金は、田内千鶴子さんの「母の愛」を受けた孤児たちが社会に出た後、自分の働いたお金からその施設に送金して、新しく入った孤児のために返返しをしているという事実を聞き、さらに驚きました。外側にいる人間よりも助けられた人の方がその愛をさらに伝えていく働きを全く知りませんでした。外側にいる私たちの方こそが、いつもそこを通り過ぎて行く祭司であり、

ファリサイ派の人なのかもしれません。

でもこの聖書のお話をとおして、私たちが神様によって守られ、助けられていることを知るならば、私たちが小さなサマリア人となってこの世の人びとに少しでも貢献できるようになるでしょう。

「善いサマリア人」として生きる

私は、東日本大震災が起こった日に東京にいました。すぐに建物の外へ飛び出すと、今まで経験したことのない大きな揺れで大地が動いている光景を見まして、日本が沈没するかと思ったほどです。震源地はどこだろうとすぐ携帯電話のワン・セグにつなぎ、震源地は三陸沖だと知りました。翌日になって、津波被害と原子力発電所の放射能漏れ事故がニュースとして流れ始めました。その被害のなかで、母親の安否を気遣い、仙台からわざわざかけつけた二人の姉妹が津波に飲み込まれてしまいました。車椅子の老人を一生懸命助けようとしたけれど、津波が押し寄せ、やむなくその車椅子を手放さなくてはならない、家族が離別する場面をテレビで見ました。また、人びとを助けるために最後まで救助活動をした消防団員や市役所の人びとの犠牲の死が報道されました。

私が特に印象に残っているのは、車椅子の老人が、おそらくお祖父さんでしょう、津波が襲ってくるのを見て、家族に「私に構わずに逃げろ、逃げろ」と一生懸命手を振って合図している場面で、家族はお祖父さんを見捨てていいのか、逃げていいのか躊躇して、その車椅子から手を離れた瞬間、車椅子とお祖父さんが流されて行く様子です。家族は啞然として、なす術もなく見守っている。もしお祖父さんが最後まで家族の手を離さなければ家族全員が死んでいたかもしれない究極の選択のなかで、お祖父さんは「もういいよ、お前たちは逃げろ」と伝えたのです。自分の命を犠牲にしても家族を助けようとする心をそこで見ました。世のなかには突き詰めると悪いことしか残らない虚しいことだけではなく、それに逆らって、お互いに愛し助け合う心が人間の心に残っているのだなあ、と思いました。

イエス・キリストはその人間が神によって造られたものであり、その失われた神の子の姿を取り戻すために、この世に来られ、その神の愛をもつように示されたのです。誰でも、イエスの愛を受け、それを理解するならば、私たちが「善いサマリア人」として生きることができるでしょう。このメッセージを引き出すために、イエスは聖書のなかで、この物語を語られたのです。「行って、あなたも同じようにしなさい」。皆さんの人生と毎日の生活のなかに、この御言葉が共にありますように、お祈りします。

2013年6月25日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録